

小さな奇跡

〈徳島県〉徳永 亜希子 40歳

Aさんは末期がんだった。Aさんには婚約者の彼女がいた。ある日、彼女から「彼の残された時間は少ないですよ。明日、役場に行つて婚姻届を出してこようと思ひます。本当は一緒に行くつもりだったけど、私一人になりそう」と告白された。

Aさんは40代、自分の病状を理解し、「死ぬのは怖くない。運命だと思ひ。でも彼女には何か残しておいてあげたい」とよく話していた。私は、明日婚姻届を出すという彼女の話をストックへ伝えた。誰かが「私たちで結婚式をしてあげられないかな」とつぶやいた。そこにいた皆が不思議と同じ気持ちだった。上司の許可をもらい、急ぎよ、会場の用意

や結婚式の準備に取り掛かった。

翌日、何も知らされず、酸素をしながら車いすで会場に連れてこられたAさんは、人目もはばからず大きな声で男泣きをした。そして、赤いドレスに身を包んだ花嫁をうれしそうに見つめていた。結婚指輪が間に合わなかったので、お互いの手首にピンクのリボンを巻き、永遠の愛を誓った。栄養課が用意してくれたウエディングケーキを、Aさんは美味しそうに口いっぱいにはおぼっていた。それまでは食事がのどを通らない状態だったのに。

ふと目が合うと、うれしそうにほほ笑んだAさんの笑顔が今でも忘れられない。
その日から小さな奇跡が起こっ

た。一時的にモルヒネの点滴や酸素も外し、外出ができるようになった。家に帰り遺産相続のことも話ってきたと安堵し、彼女と穏やかな時間を過ごした。

式から2週間後、Aさんは永眠されたが、しばらくして、彼女から手紙が届いた。手紙には「棺のなかの彼の手首に、結婚式の時のピンクのリボンを巻いてあげました。私の分はお守りとして、大事に持つておきます」と書かれていた。私たちの心がじんわり温かくなった。

「本当に大切な緩和ケア」をAさんや彼女、そこにいたスタッフを通じて教えてもらった。誰かを大切に思ひ気持ちは、時に小さな奇跡を起こすのだと思ひ。